

「地盤工学会誌」 読者アンケート集計結果

「地盤工学会誌」10 月号 (Vol.64 No.10)

特集テーマ:実務における数値解析技術

回答人数:31 人／50 人中 回答率 62%

① 最も興味深かった記事について

【1位】 報告:軟弱地盤上盛土の長期圧密沈下予測に対する数値解析の適用と事後評価

【2位】 総説:実務における数値解析技術の歴史と推移及び今後の展開

【3位】 論説:実務における数値解析技術の課題と留意点

② 自由意見欄

I 記事に対するご意見

1	浸透の数値解析に関する記事もあると良かった。
2	施工側の者として、解析手法に関する記述は理解が難しい
3	数値解析をよく使っていますので、今月号の内容は全て興味深く読ませて頂きました。
4	記事の難易度がいつもより高かったように思いました。解析技術の歴史と展望について知られたのは良かったと思います。
5	土質力学・地盤工学に関する解析の予測精度は、それほど高くないように昔から認識していましたが、pp.14、15によれば、精密科学のようにほぼぴったりと実現象をトレースできており、いろいろな意味ですごいなと感じました。
6	報告「軟弱地盤上盛土の長期圧密沈下予測に対する数値解析の適用と事後評価」について、NEXCOの設計要領にも紹介された水～土連成有限変形解析コードGEOASIAの実試験盛土10年の予測値の事後評価が報告され、高い予測精度を持つことが示されており、大変有益な報告でした。北海道内の軟弱地盤設計実務者への活用・展開が望まれる解析技術と感じました。
7	「講座」地盤工学に必要な岩石学、鉱物学の基礎と現場分析手法は、基礎的なことがとてもわかりやすかった
8	数値解析の事例などの内容がありまして、業務等にも利用でき有用な内容であったと思います。
9	私の会社で施工している東北地方の防潮堤盛土工事において、圧密沈下が収束しない状況が岩手県、福島県で確認されている。沈下速度は小さいが、長期的に継続しているのが同様な特徴である。高さに規定のある盛土構造物において、施工段階でどこまで上げ越しを実施するのか（上げ越した分だけ沈下も進行）判断が難しいところである。沈下計算および沈下推定は簡易手法に基づい

	て実施されている。今回報告のあった長期圧密沈下予測に対する数値解析の事後評価の精度を見ると、かなり高い予測精度があることから、土構造物であっても精度の高い管理を要求される構造物においては、簡易手法による予測沈下量が小さくとも、現地の地盤状況を的確に反映できる数値解析手法が必要であると感じた。構造物を完成させなければならない期間が短い場合においても、重要構造物で事後の対策に費用と時間がかかるようなケースでは事前の調査と数値解析を十分に実施し、長期的な視点で設計を行う必要があると感じた。
10	数値解析に精通しない者としては難しく感じる記事もあったが、勉強になった。
11	PC やワークステーションの性能が上がり、ソフトがあれば数値解析できるようになりましたが、かつての手計算をして実感したことを、今の若手技術者にも経験させたい。
12	10月号の特集が「実務における数値解析技術」ということで、誰もが興味を抱くテーマであり、実務での取り組みも多くなってきているにも関わらず、報告数が少ないように感じられた。成功例だけでなく、実現象とうまく整合しない事例や課題などもオープンにできる場があれば、数値解析技術の発展につながるのではと思います。

Ⅱ 今後取り上げてほしい記事

1	耐震地盤調査事例
2	地熱発電
3	工事における地盤トラブル事例（博多の陥没事故の原因と対策、事故から得られる教訓）
4	急速に導入が進んでいる I C T 技術について、地盤工学的な課題および留意点等を取り上げてみてはどうか
5	引き続き、解析や調査、設計事例などを取り上げていただければと思います。
6	・台風災害の事例、段階的復興技術　・広範囲土石流に対する予測、モニタリング技術　・排水系統、集水マス等の異常豪雨への対策
7	地盤工学の歴史
8	耐震地盤調査事例
9	地熱発電